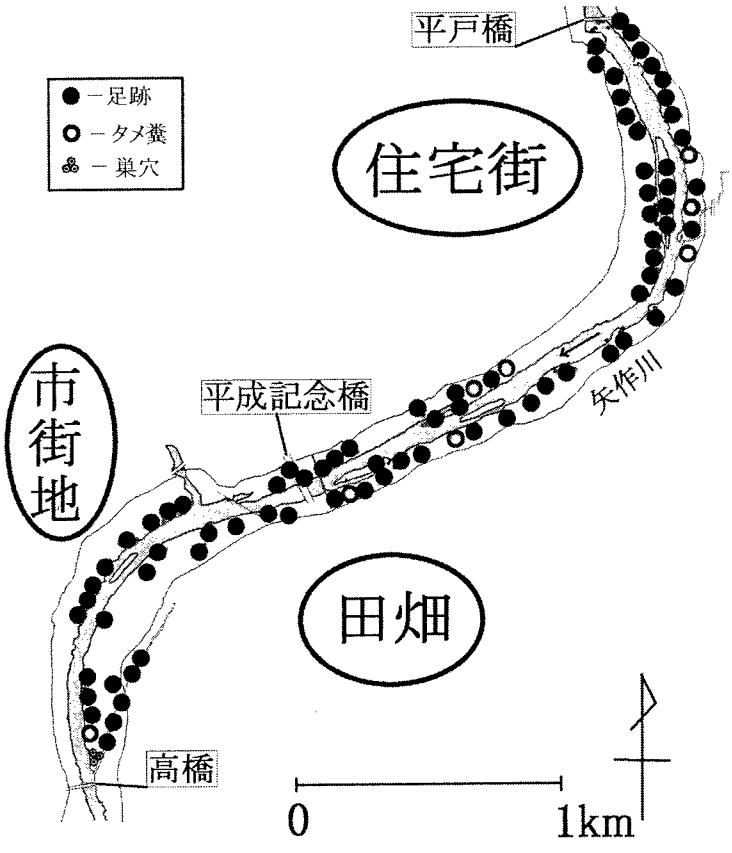
市街地河川敷におけるタヌキの生息調査

愛知工業大学　正会員　○四俵正俊、景生保全研究所　千々岩哲
愛知工業大学　下里真士、鶴岡宗尚、深尾明宏

1．はじめに

我が国では、河川敷、特に大きい川の河川敷は、開発が自ずと制限されること、水に接して環境が多様であることなどによって、水棲動物のみならず、陸棲動物にとっても、都市近郊においては数少ない生息場所（ハビタット）として重要であると考えられる。さらに河川敷は、その連続性から、野生動物の生態学的回廊（コリドー）として、あるいはビオトープの連携をはかる上で貴重な空間でもある。筆者らは、河川敷のこのような機能を確認するため、数年前から名古屋圏東部近郊の河川敷において、小型ほ乳類の生息調査を行っている。現在は、矢作川の豊田市街に隣接する区間においてタヌキの生息調査を実施しており、これはその第一報である。

なお、この調査は、豊田市矢作川研究所が中心になって豊田市扶桑町周辺で行っている河川環境復元総合調査研究事業「矢作川古鼡（ふっそ）プロジェクト」の一部でもある。



図－1　タヌキの痕跡

2．調査区域、調査期間、調査方法

タヌキ生息調査の対象区域は、矢作川中流部、豊田市内の平戸橋（河口から 44.7 km）から高橋（40.5 km）までの左右岸である（図－1参照）。区間の右岸側はそのまま市街地に接し、左岸側には田畑が広がる。河川敷内の陸寄りには、マダケの林が多い。

２００１年５月から毎月、痕跡調査を実施している。調査時には、は虫類、両生類の現認調査も併せて実施している。これは、タヌキの餌になりうる動物の基礎調査という意味を持つ。一回の調査は、３～５名が２日または３日かけて実施している。この他、調査区域のこれまでに調査区間の植生調査を行った。

１２月からはこれに加えて、テレメトリー調査のための罠による捕獲を試みている。また、現地調査中に随時、作業や釣りをしている人からの聞き取り調査を行っている。

３．現時点（１２月１４日）までの調査結果

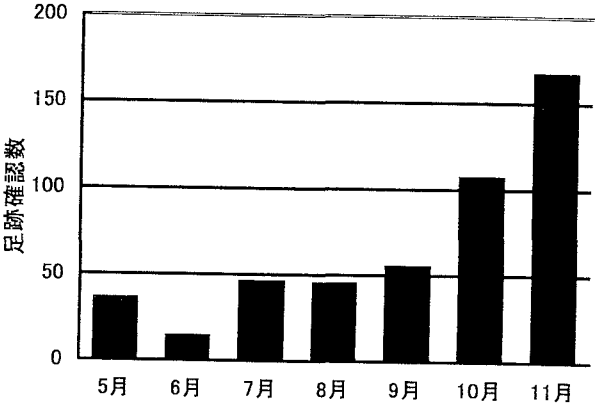
は虫類、両生類の調査では、ウシガエル、トノサマガエル、ヌマガエルなどのカエルのべ数百個体、カナヘビおよびニホントカゲのべ数十個体などが視認された。これらの動物の視認は、ほとんど夏季に限定されており、１０月以降は数えるほどしかない。

図－１には、見つかったタヌキの痕跡をすべて記入してある。痕跡のほとんどは足跡である。ため糞は、現在までに８箇所が確認されており、うち４箇所は現在も使われている。　調査区間のため糞は、すべてマダケ林の中にある。糞には、カキ、エノキの種子および昆虫類が含まれていることが目視によって確認された。

他に、やわらかい砂地に掘られた、巣ないしは休息場所と考えられる穴を４個見つけた。

図－２はタヌキの痕跡数の月変化を示す。痕跡数を数えるとき、一連の足跡は１個と数え、また不確かなものは除いてある。痕跡数は月毎に増加しているが、その理由として次のようなことが考えられる。

・今年生まれたタヌキが出てきた。
・昨年の東海豪雨による増水で減少したタヌキが回復している。
・調査に慣れて発見する数が増えた。



図－２　月別タヌキ足跡確認数（２００１年）

聞き取りによって、少なくとも１０年前には調査地でタヌキ猟をしていた猟師がいた、という情報が得られた（猟友会で確認）。タヌキが豊田市街地周辺に、最近まで比較的豊富にいたと考えられる。また、現在川沿いの民家の床下に住んでいるタヌキがいるという情報も得た。

１２月に入って２日間罠をセットし、一頭のタヌキを捕獲したが、重度の皮膚病に冒されていたため発信器の取付を行わなかった。

タヌキ以外には、イタチ、イヌ、ネコの足跡がたくさん見られ、キツネの足跡も見つかっている。また聞き取りによると、ハクビシンが周辺の畑を荒らしているという。

４．まとめ

豊田市街に隣接する矢作川河川敷で、一定数のタヌキが行動していることが確認された。

今後、現在までの調査方法に加えて、テレメトリーによる追跡調査、システマティックな聞き取り調査、糞の詳しい分析などを併せて行っていくことを考えている。

参考文献

１）豊田市矢作川研究所：河川環境復元総合調査研究事業（矢作川古**鼡プロジェクト）平成12年度調査報告書**
２）四俵正俊他：イタチの生息場所としての都市近郊河川、応用生態工学研究会 第４回研究発表会講演集 pp.39-40、